

群 教 七	G11 - 03
	平25.251集
	小・学級活動

根拠を明らかにして 自己決定・集団決定ができる学級活動

—身近な人の思いや考えを取り入れた資料投入の工夫を通して—

特別研修員 小野 美果

I 主題設定の理由

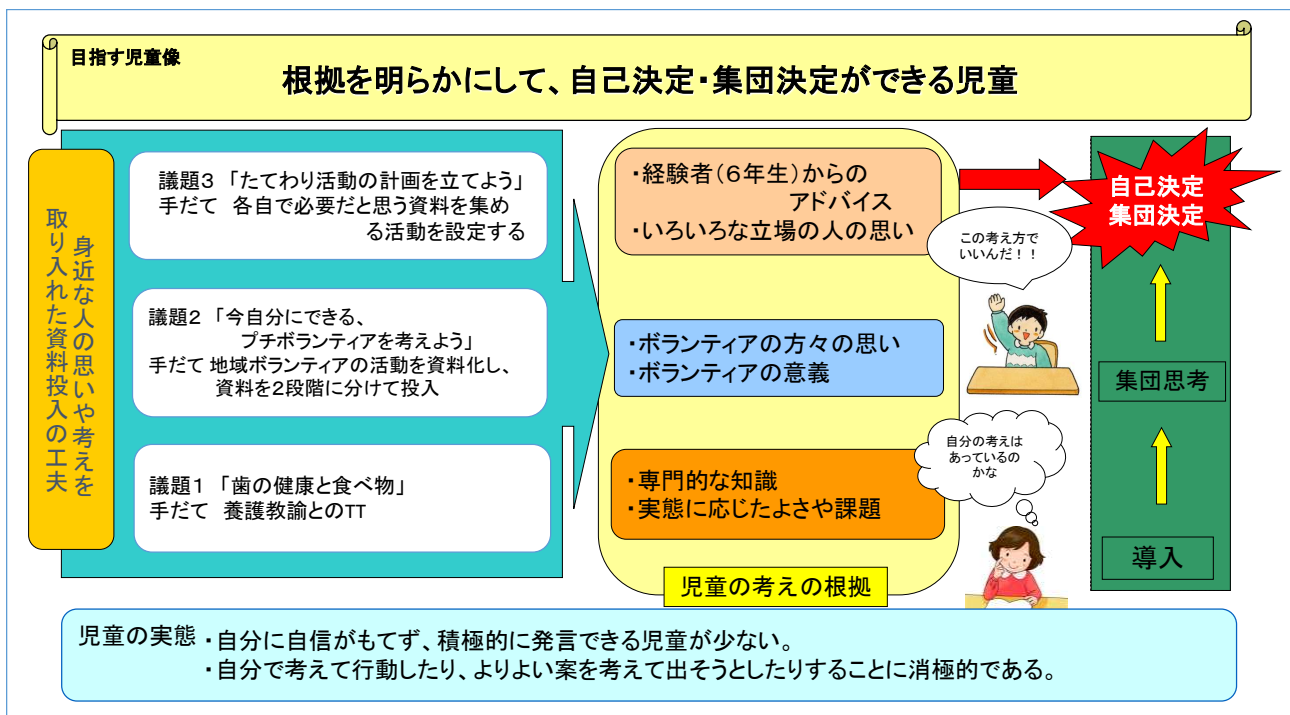
「はばたく群馬の指導プラン」には、本県児童生徒の伸ばしたい資質・能力「豊かな心」の一つとして、「向上する心」が挙げられている。

本学級の児童は、素直で、係や当番の仕事などに真面目に取り組んでいる。しかし、自分自身でよい考えをもっているにもかかわらず、話し合い活動での発言に消極的になることがある。また、自分で必要なことを考えて行動したり、よりよい案を出したりすることにも消極的である。

自分の考えの根拠を明確にできれば、自分の意見に自信をもつことができ、進んで発言し自信をもって自己決定や集団決定をすることができると思う。しかし、これまでは、考えの根拠は、児童の経験や感覚を基にすることが多かった。これは、考えの根拠を明確にするための情報が不足していたことが主な要因であった。そこで、資料等を意図的に投入することで自己決定や集団決定の根拠を明確にすることへつなげたいと考えた。以上のことから、上記の通り主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手だて

話し合い活動の中で自分の意見を積極的に発言するためには、意見の根拠となる情報や資料が必要である。そこで、資料投入のタイミングや工夫を行い、発言の根拠につながる情報を授業の中で得られるようにした。児童の意見の根拠となるものをそこから得ることができれば、根拠を明確にして自己決定や集団決定ができるであろうと考え、以下の手だてを試みた。

題材「今自分ができる、プチボランティアを考えよう」(第5学年 2学期)

実践2における研究上の手だて

- 地域ボランティアの方々の思いを資料化し投入する。
 - ・地域ボランティアの方々の思いに気付けるようにする。
- 資料を2段階に分けて投入する。
 - ・自分がボランティアをすると相手はどんな気持ちになるのか気付けるようにする。
 - ・ボランティアは、他の人のためだけではなく、自分のためにもなることに気付けるようにする。

実践2では、身近なボランティアの方々の思いを知り、それを意見に結びつけて根拠とし、積極的に発表することができた。資料を2段階に分けて投入したことで後半の資料投入時には、自分が実際に行おうとする実践意欲をもつことができた。しかし、受け取る側にとっては、一方的に情報が提供されるだけになってしまうので、更に児童が意欲的に話し合い活動に参加できるように、実践3では、児童自ら資料を集める活動を取り入れることとした。

題材「たてわり活動の計画を立てよう」(第5学年 3学期)

実践3における研究上の手だて

- みんなが楽しめる縦割り活動の内容や進め方の工夫について、情報を集める場を設定する。
 - ・縦割り活動を経験してきた6年生に、成功するための秘訣を聞く。
 - ・縦割り活動の担当の先生、低学年の児童、兄弟や友達に楽しめる遊びを聞く。
 - ・図書室やインターネットなどで遊びを調べる。

実践3では、必要だと思う資料を自ら集めることで、自分の考えの根拠となる情報を集めることができ、活発に話し合うことができた。遊びの情報の他にも、縦割り活動を行う際の注意事項などもしっかりと聞くことができ、教師からではなかなかアドバイスできない細かい情報も得ることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 養護教諭や6年生といった身近な人の話を聞く場を設定したり、地域ボランティアの方々の思いをまとめ資料化して取り入れたりしたことで、児童は議題を身近なものとしてとらえることができた。また、自分の考えを裏付ける情報を得ることができ、自己決定や集団決定をする場面では、自分なりの根拠を考えて、取り組むことを決定することができた。
- 共通の情報を得られたことで、話し合いの中でも積極的に発言する児童が増えた。また、情報の共有が図られ、話し合いが活発化した。そのために、自己決定した課題について意欲をもって取り組む姿が見られた。また、集団決定したことが話し合い前の自分の意見と違っても、根拠を明確にした話し合いを経て納得をしており、決めたことに協力をして取り組む姿が見られた。

2 課題

- 映像化した資料は児童の中に強く印象に残り、口頭で伝えた情報の印象を薄れさせてしまった。資料を厳選するとともに、提示方法を変えたり、軽重を付けたりする必要がある。
- 小集団の討議には、意見を出し合う場合と収束させる場合の2種類がある。その種類に応じてフリートークのような方法とルールを決めて話し合う方法とを使い分けていく必要がある。

3 提言

- 提示する情報やタイミングによって児童の思考に大きく影響し、自己決定の根拠になるだけでなく、話し合い活動の意見の根拠にも生かすことができた。意見の根拠がはっきりしていると、児童は、自分の意見に自信をもって発言することができ、活発な話し合い活動を行うことができる。提示する情報は、児童がより身近に感じる内容がよい。提示のタイミングは、議題によって様々である。より効果的な提示を行うために、授業のねらいを明確にし検討していく必要がある。

IV 実践及び改善の実際

実践 2

1 議題名「今自分ができる、プチボランティアを考えよう」(第5学年 2学期)

2 本議題及び本時について

本議題は、集団の一員として生活をよりよくするために、自分にできることを見付け、実践化を図るものである。本校では、地域から多くのボランティアの方々が教育活動に参画してくださっている。一方、多くの児童がボランティア活動はよいことだと思っているが、実際に活動するのは難しいと考えている。そこで、ボランティアの方々の思いを提示することで、自分を含め、みんなのためになる取組がよい取組だということに気づき、自信をもって自己決定できるようにしたいと考え、以下の通り実践した。

3 授業の実際

導入の場面では、議題の確認後、学級の実態調査アンケートの結果を計画委員が報告する場、児童自身が調査したボランティアの方々のインタビュー結果を発表し合う場を設定した。学級の実態のアンケートでは、ボランティア活動はよいことだと思うけれど、自分に何ができるか分からない、あるいは、迷惑になるのではないかと不安に思っている児童が多かった。そこで、<資料提示1>では、ボランティアは、自分でできることに取り組むことから始めればよいという内容が児童に伝わるようにした。発表は、ボランティアの方々が実際に活動している様子を写真で紹介しながら行った。

<資料提示1>学校ボランティアの方々の思いの紹介

ボランティアの方々の思い (インタビュー結果を児童が発表)	児童の反応
・読み聞かせなら、自分にできそうだったから。	S1: 自分ができることをすればいいんだな。
・先生や子どもたちからのお礼がうれしいから。	S2: だれかのためにできるってすごいな。
・赤ペン先生をして、自分にできることを少しでもお手伝いできればよいと思う。	S3: 得意なことを生かせばいいな。
・図書室に足を運ぶ児童が少しでも増えるとよいと思う。	

<資料提示1>を受けて、5年生として学校みんなにできることを話し合った結果、以下のようなプチボランティアが提案された。

- ・トイレのスリッパをそろえる。
- ・ゴミを拾う。
- ・あいさつ運動を手伝う。
- ・配り物を手伝う。
- ・勉強の分からない人に教える。
- ・怪我をしている低学年を保健室へ連れて行く。
- ・休みの子の机を運ぶ。
- ・物が倒れていたらきれいにする。
- ・ボランティアの人にお茶を出す。
- ・鉛筆や消しゴムを持ち主に届ける。
- ・困っている人を助ける。
- ・学校行事の手伝いをする。 等

集団思考の場面では、これらの意見を「すぐできる」「何でもできる」「だれかのためになる」という三つの視点を基に自分にできそうなことについて話し合い、より児童が実行しやすい活動に絞り込んでいった。「困っている人を助ける」や「学校行事の手伝いをする」などの活動のイメージをもちにくい意見が削られ、以下のような、具体的にイメージできる活動に絞られた。

- 例) S1: あいさつ運動を手伝うのは自分にもできる。
- S2: 勉強の分からない人に教えるとよい。それぞれに得意な教科があるから。
- S3: トイレのスリッパをそろえれば、みんなのためになるし、すぐできるし、何でもできる。
- S4: 休んだ子の机を運ぶことは、みんなのためになるし、すぐできる。
- S5: 教室のゴミを拾ったらみんなが気持ちよく使える。

自己決定の場面では、ボランティア活動は人のためだけでなく自分の喜びや生き甲斐にもなることに触れ、児童の実践意欲を高めるために＜資料提示2＞を行った。ここでは、田植えや稲刈りといった自分たちが取り組んできた活動を振り返り、ボランティアの方が児童の見えていないところでも鳥よけテープを貼ったり、草刈りをしたりしてくれていたことを紹介した。その他にも、読み聞かせボランティアやミシンボランティアの活動の様子を紹介し、＜資料提示1＞では紹介しきれなかったボランティアの方々の思いを紹介した。また、児童が普段何気なく行っている他者のためになる取組の様子を紹介するとともに、このような行いもボランティアと同じだということを伝え、実践意欲を高めるよう工夫した。

＜資料提示2＞4月からお世話になっている米作りの講師の方の思いの紹介

米作りの講師さんの思い(プロジェクトで紹介)	児童の反応
<ul style="list-style-type: none"> ・4月からの米作りの様子を振り返りながら、児童の知らないところでもいろいろな活動をしてきていたことを紹介する。 ・講師さんは、「誰かのためにやる」だけではなく「自分の喜びや生き甲斐である」と話してくれたことを紹介する。 	<p>S1：自分の知らないところで、いろいろなことをしてくれていたんだな。</p> <p>S2：こんなにたくさんのことをしてきていたなんて知らなかったな。</p> <p>S3：ありがたいな。</p> <p>S4：自分がやったことが人のためになると自分もうれしくなるな。</p>

＜資料提示2＞により、自分が行ったボランティアが人のためだけでなく自分のためにもなることが分かった。その後、自分がこれからやってみようと思うプチボランティアとその根拠となる理由をワークシートにまとめ、発表し合った。

- S1：ぼくは、他の人が使ったトイレのスリッパも揃えるプチボランティアに取り組みようと思います。理由は、すぐできるし、何度もできて、トイレを使うときにみんなが気持ちよくなると思うからです。
- S2：私は、あいさつ運動を手伝おうと思います。理由は、あいさつをすると自分も気持ちがいいし相手も気持ちよくなるからです。

ワークシートの自己決定した理由を書く欄には、図1のように、＜資料提示1＞と＜資料提示2＞から得た情報を基に根拠を明確に記述した児童が多かった。また、集団思考の場面で投入した三つの視点から根拠を考えた児童もみられた。

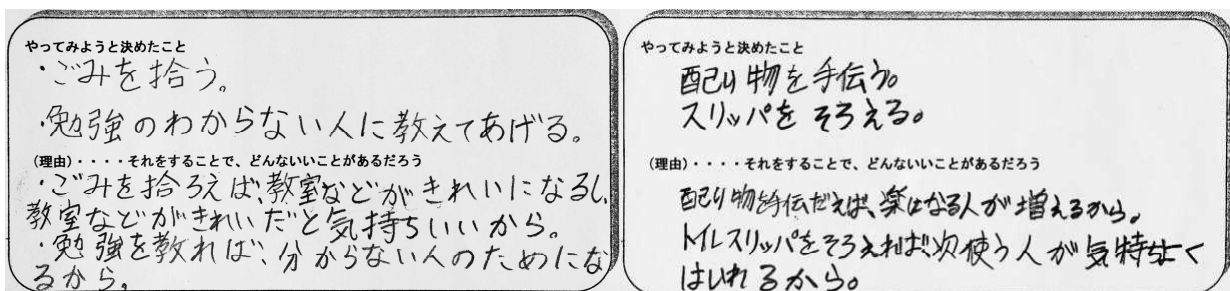


図1 本時のワークシート＜自己決定の部分＞

4 考察

ボランティアの方々からの情報を取り入れたことで、児童は議題をより身近なものとしてとらえることができた。ワークシートの自己決定の部分には、＜資料提示1＞にかかわる根拠を記述した児童は29名いた。ボランティアが誰かのためになるということを十分にとらえられたことが分かる。また、＜資料提示2＞にかかわる根拠を含めて記述した児童は6名おり、ボランティアが誰かのためだけでなく、自分の喜びにもなるととらえられた児童もいたことが分かった。このことから、本時の資料投入は、根拠を明確にして自己決定することに有効に働いたと考える。しかし、資料投入は受け取る側にとっては一方的に情報が提供されるだけなので受け身になってしまうことが課題である。

実践3

1 議題名「たてわり活動の計画を立てよう」(第5学年 3学期)

2 本題材及び本時について

本校では、異学年交流の場である縦割り活動を、今までは6年生が中心になって進めてきた。そして、最終回となる2月には、5年生が中心になって行う最初の縦割り活動が位置付けられている。そこで、6年生の経験を聞き、どの学年も楽しめて、6年生への感謝の気持ちが伝わるような活動を考えることを通して、相手への感謝の気持ちを持ち、それを伝えることできる児童の育成を図ることとした。また、自分たちで企画して運営していく活動を通して、より自主的・実践的な活動が期待できると考え、本題材を設定した。

3 授業の実際

本時は、授業実践2を受けて、受動的になってしまう資料提示を児童の主体的な活動にしたいと考え児童自身の調査活動を事前の活動に取り入れた。事前の準備として、自分がやりたい遊びとその理由をワークシートにまとめておいた。遊びは、付箋に書いて準備させておいた。

事前の活動(児童自身による調査活動)

- ・縦割り活動を経験してきた6年生に、成功するための秘訣を聞く(図2)。
- ・縦割り活動の担当の先生、低学年の児童、兄弟や友達に楽しめる遊びを聞く。
- ・図書室やインターネットなどで遊びを調べる。

導入の場面では、議題を確認後、それぞれの班で6年生に聞いてきた「縦割り活動を成功させるための秘訣」を発表し合った。その後、どの班にも共通する「大切なこと」を確認した。

大切なこと(例)

遊びの計画を立てるときには

- ・どの学年も楽しめる遊びを考える。
- ・みんなが分かりやすいルール of 遊びにする。
- ・きちんと計画を立てる。

たてわり活動を行うときには

- ・大きな声で分かりやすく説明する。
- ・みんなで協力する。
- ・低学年に話しかけたり、やさしくしたりする。



図2 6年生へインタビューする様子

小集団での話し合い活動の場面では、【決まっていること】の確認後、縦割り活動の内容や工夫の話し合いを進めるよう指示した。事前の調査活動によって根拠が明確になっている分、各自がよいと思った遊びを互いに折り合いを付け、班で絞り込んでいくのは難しいであろうと考え、本時では図3に示したように「よりなかよくなれるか」「より実行しやすいか」という二つの要素で価値付けできる話し合いボードを使用した。

【決まっていること】

- ※時間は20分である
- ※場所は教室
- ※6年生へのお礼の言葉を入れる
- ※6年生から一言ずつ話してもらおう

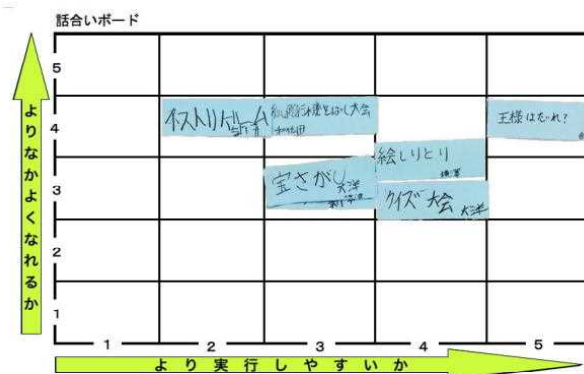


図3 話し合いボード

縦割り班11班の討議の様子

S1:「宝探し」がよいと思います。点数を付けて1～3位までにプレゼントできるからです。

S2:「宝探し」がよいと思う。ぼくがやって楽しかったから。

「紙飛行機飛ばし大会」もよいと思う。自分で紙飛行機を作って飛ばしたら楽しいから。

S3:「宝探し」がよいと思う。6年生が楽しいと言っていたからです。

S1:「宝探し」は同じ意見が多いから決定でよいと思います。

司:反対意見はありますか?

S2:「宝探し」は探すのに3分?5分?時間がかかるね。

S1:(話し合いボードの右上にあった三つの遊びを指さしながら) じゃあ、この「絵しりとり」と「王様はだれ」と「宝探し」の中から考えればいいんじゃない?

司:三つの遊びの中から自分がよいと思うものに理由を付けて意見を出してください。

S2:「絵しりとり」はあまりしゃべれないから、仲良くなれないし、やめた方がよいと思う。

「宝探し」は宝が見付からなかったら、時間がかかるし、1回しかできないかもしれないね。

S3:「王様はだれ」は鬼が見付かっても何回でもできるからよいと思う。妹も楽しいと言っていたよ。

S1:「王様はだれ」なら実行しやすいのでよいと思う。

司:「王様はだれ」でいい?

全:(うなずく)

司:次に、気を付けることを決めます。・・・・・・

このように11班では、前半で、「宝探し」の案が多く出されていた。しかし、波線のS1の発言を司会がうまく受け入れて進行し、話し合いボードの中央部分に貼られていた「宝探し」と右上に貼られていた「絵しりとり」「王様はだれ」に絞って話し合いを進め、意見がまとまった。児童の意見の根拠には6年生や兄弟の意見などが生かされ、話し合いボードの二つの軸によって整理・分析され、よりよい意見としてまとめるに至った。

決まったことを発表する場面では、各班の代表が、決まった遊びと縦割り活動当日に気を付けることの2点について発表した。なぜその遊びに決まったのか、理由とともにしっかりと発表することができた。さらに、ほかの班の工夫を聞き、自分の班の取組に生かそうとする姿も見られた。

S1:僕たちの班は、「ハンカチ落とし」にしました。理由は、準備もすぐできるし、4・5・6年にハンデを付ければ低学年も楽しくできると思ったからです。縦割り活動当日に気を付けることは、「大きな声でゆっくり話すこと」「自分たちが動いて分かりやすく表現すること」です。

T:具体的にはどんなハンデを付けるのですか?

S1:4・5・6年生は、走らずに早歩きをしなければならないというハンデです。

他にも「ハンカチ落とし」に決定していた班があったが、ハンデを「高学年は全力を出さない」としていた。同じようなハンデであるが表現の仕方を工夫した方がよいという確認を全体の話し合いの場面ですることができ、他の班にも参考になった。

4 考察

議題に切実感があり、児童は意欲的に情報収集を行った。さらに、6年生にアドバイスをもらったことで、遊びを考える際に、自分たちがやりたい遊びを考えるのではなく、みんなのために遊びを考えるという意識が高まった。本時では、教具として話し合いボードを取り入れ、意見を分析・整理できるようにした。逐語録からは、話し合いボードの軸であった二つの価値が班での集団決定の根拠に大きく影響したことが分かった。このように、根拠を明確にするための情報提示と、話し合いボードのような思考ツールを併用することが、根拠を明確にした集団決定に効果的であることが分かった。